「満州国」の成立

「満州事変」を報じる「東京朝日新聞」
（1931年9月19日付）

奉天城正門（上）と城内市街地（下）

奉天城へ砲撃を開始

駐在二十九聯隊出動

奉天付近
約三大隊
在

第二調査
中村大

正式回答

奉派極度

省政府の

王道楽土をうたった碑

満州事変の発火点・柳条湖の満鉄爆破地点。日本軍の陰謀で中国側のしわざとされた。直後に奉天行きの列車が通過したほど爆破は小規模なものだった。

日露戦争以降、満州（中国東北部）に特別な権益を得た日本は、中国北部の軍閥・張作霖を利用し、資源や農産物の獲得など、権益を拡大してきました。

1926年、蒋介石が軍閥打倒をかかげ「北伐」をはじめると、日本は「邦人保護」の名目で関東軍を派遣。武力で権益を守ろうとしました。

1928年6月、関東軍は、日本に協力的でなくなった張作霖を列車ごと爆殺。さらに1931年6月18日、満州鉄道を爆破し、これを中国軍のしわざに見せかけ、満州を占領（満州事変）。翌1932年に「満州国」を成立させました。

「満州国」は、日本、中国、満州、朝鮮、モンゴルの5つの民族が協力する理想の国として、「五族協和」「王道楽土」をかかげますが、日本の行為は国際的に非難され、1933年、日本は国際連盟を脱退。国際的に孤立していきました。

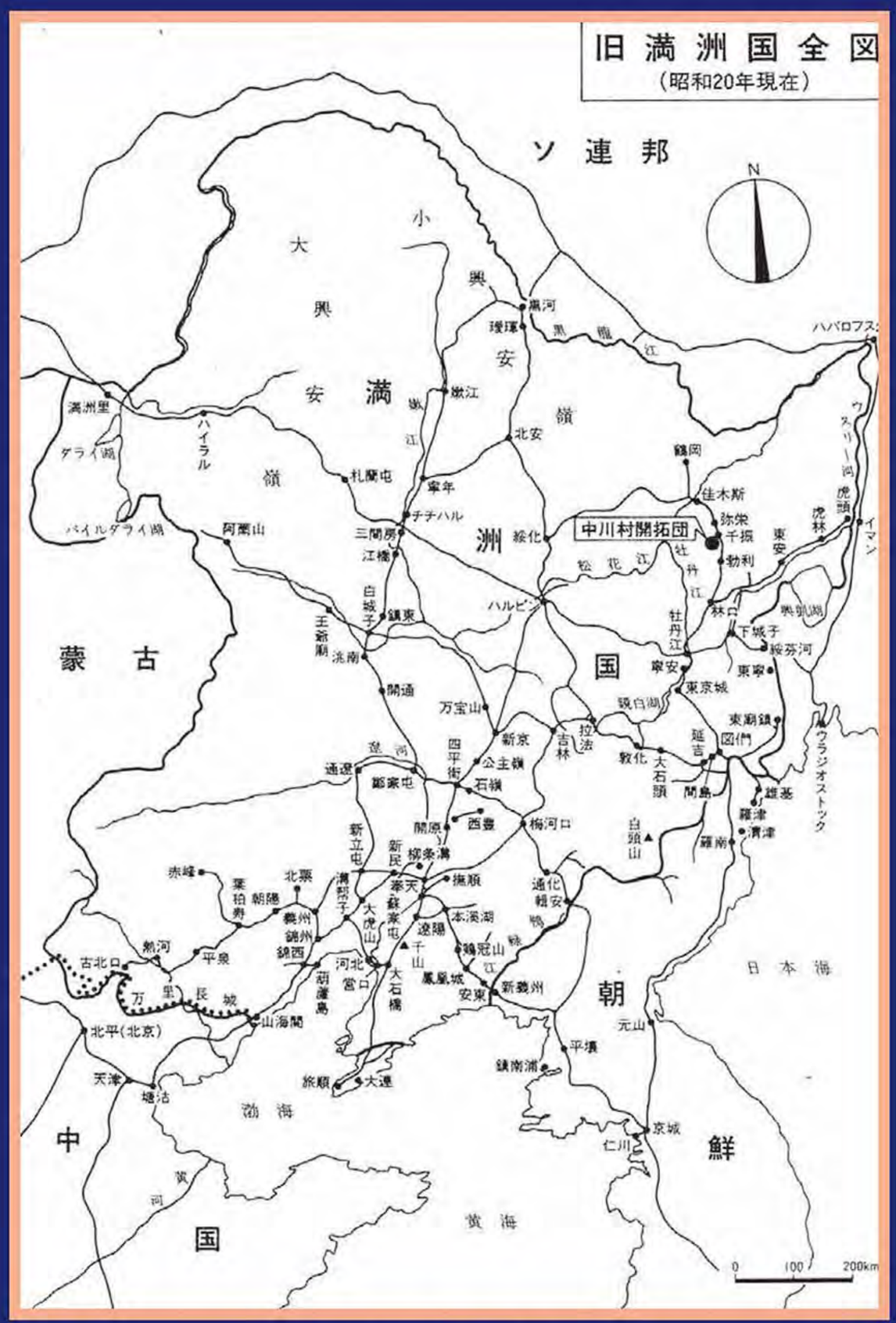
満州への移民政策

「満州国」を成立させた日本は、「産業開発５カ年計画」「北辺振興計画」に加えて「開拓政策」をすすめます。

1936 年に策定された「開拓政策」は、当初は、1937 年から 20 年かけて 100 万戸、500 万人の日本人農業開拓民を移住させるというものでした。その後、38 年からは満 14 歳から 19 歳の男子を満蒙開拓青少年義勇軍として組織し、満州へ送り出すことになります。

このように満州へ大量の移民を送り出した背景には、人口過剰・食糧不足・資源確保という経済問題解決のためだけではなく、「満州国」における日本人の発言力の強化やソ連に対する防衛などの思惑もありました。

1945 年までに、全国から送り出された開拓団員は、900 団・約 22 万５千人（埼玉からは７団・2521 人）、満蒙開拓青少年義勇軍とあわせて約 32 万人が送り出されたのです。



開拓民送り出し状況

（人 / 合計数の多い順）

都道府県	開拓団員	義勇隊員	都道府県	開拓団員	義勇隊員
長野	31,264	6,595	愛媛	2,200	2,325
山形	13,252	3,925	兵庫	2,170	2,230
熊本	9,979	2,701	埼玉	2,900	1,968
福島	9,576	3,097	佐賀	2,800	1,500
新潟	9,361	3,290	栃木	1,429	2,802
宮城	10,180	2,239	大阪	2,030	2,125
岐阜	9,494	2,596	三重	2,753	1,309
広島	6,345	4,827	鳥取	1,339	2,287
東京	9,116	1,995	茨城	1,551	2,022
高知	9,151	1,331	宮城	1,769	1,613
秋田	7,814	1,638	京都	1,418	1,952
静岡	6,147	3,059	徳島	1,243	20,82
群馬	6,957	1,818	和歌山	1,272	1,877
青森	6,510	1,855	北海道	2,002	1,127
香川	5,506	2,379	福岡	1,669	1,445
石川	4,463	2,808	島根	1,507	1,528
山口	3,763	2,745	沖縄	2,350	644
岩手	4,443	1,993	大分	735	1,836
岡山	2,898	2,888	愛知	634	1,724
鹿児島	3,432	2,268	長崎	747	1,403
奈良	3,945	1,298	千葉	1,037	1,111
富山	3,775	1,425	神奈川	1,013	575
福井	3,057	2,079	滋賀	93	1,354
山梨	3,166	1,939	合 計	220,255	101,627

※「満州開拓史」より。1945 年５月ごろの状況をまとめたものだが、計画段階の数や退団者もふくんでいるため、実際の人数はこれより何割か少ない

国防的見地から

関東軍参謀長
東条　英機

満州の農業は単に経済的に見た農業移民的見地から行われるべきではない。国防的見地から、出来るだけ多数の日本農民を入れるべきで、農業を機械化し、営利的に経営しようというのは不都合である。

貧困にあえぐ村

戦前、貧困にあえいでいた旧荒川村は、戦後になって、そばの生産を奨励し、合併して秩父市になるまで、「しだれ桜とそばの里」として知られるようになりました。下は青雲寺のしだれ桜。

現在秩父市となった旧荒川村は、戦前、中川村と白川村の２つの村に分かれていました。

山間地のため、農家戸数に対して耕地面積が少ない両村では、養蚕、機織り、山仕事などで生計をたてていました。しかし、1929 年に始まった世界恐慌で、生糸の値段が暴落するなど、その影響は深刻でした。

政府は、困窮する村々に「経済更生計画」を立てさせ、「経済更生特別助成村」の指定をおこないました。中川村は、1933 年に経済更生指定村となります。

経済更正計画を立案しているさなかに、国や県の役人たちが相次いで訪れ、計画のなかに分村計画を組み入れ、実行することをすすめます。これに積極的に応えたのが、役場職員で在郷軍人会分会長の堀口辰三郎でした。

「満州へ行こう」―分村計画

満州開拓に出発する団員を送る壮行会（武州中川駅 1938 年5月）

満州における中川村開拓団本部

「貧乏村で生活しているより、広い満州に行かないか…？　一人 10 町歩の畑がもらえるのだ」（満州中川村開拓団記録編集委員会『凍土からの叫び』より）――堀口辰三郎らの「満州に行こう」というよびかけは、貧困にあえぐ村民らにとって「夢のような」話でした。

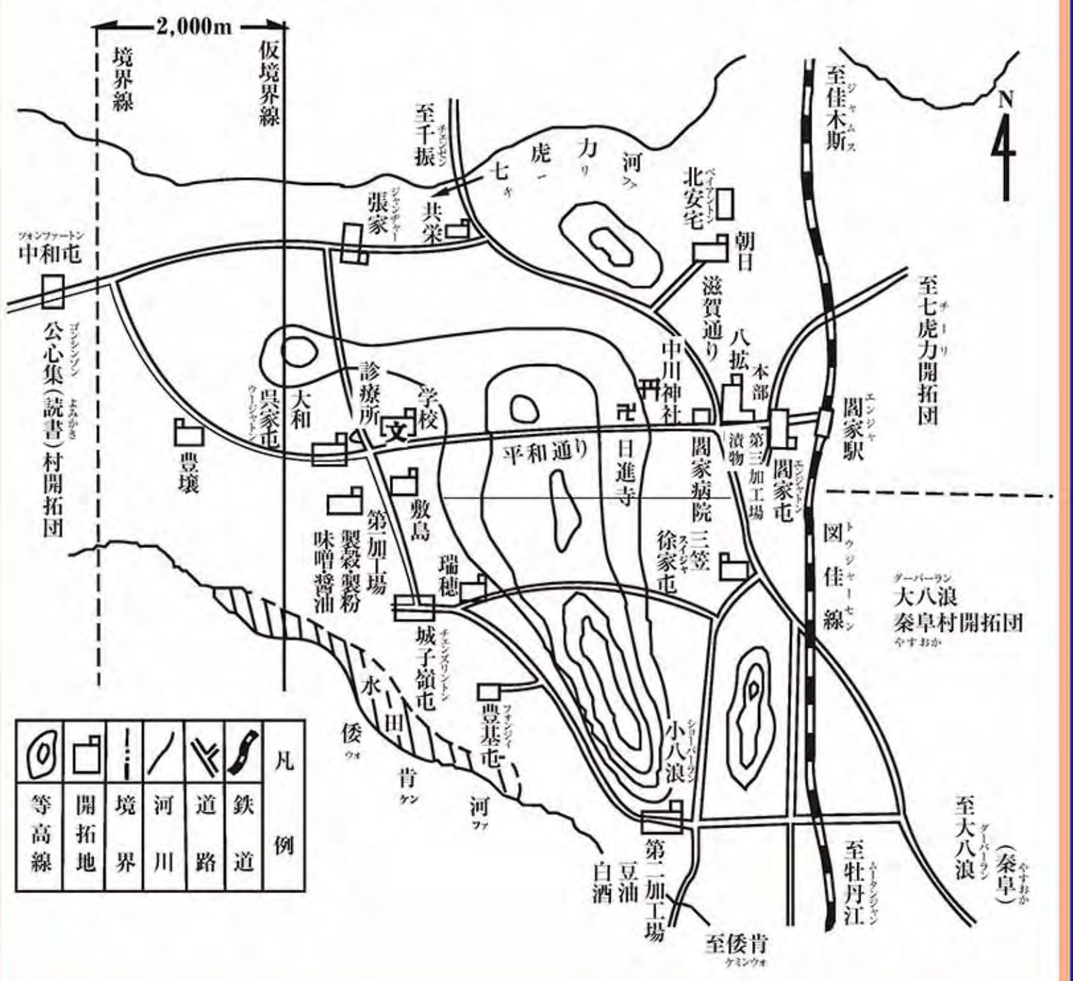
埼玉県移民専任職員の中島慎三郎、県社会課長の鈴木俊一（後の東京都知事）、拓務省の峠明らの勧奨で、1937 年 10 月中旬には第 1 次分村計画が、村の首脳部会で決定されました。

以降、拓務省、埼玉県、満州移住協会などによる移民宣伝、講演会、映画会など、村を挙げての活動で、12 月下旬には 40 人の第 8 次中川村先遣隊応募者が集まりました。

開拓団幹部候補には、堀口辰三郎に加え、宮崎由雄、町田政一が選任されました。

一方、白川村でも分郷することが決まり、第 8 次楡林開拓団に編入。1939 年 2 月に先遣隊が入植しました。

中川村開拓団の略図



満州でのくらし

中川村開拓団が行った先は、現在の黒竜江省樺南県小八浪で、入植者は 135 世帯 593 人。総面積は約 1 万ヘクタール。内訳は山林 3100 ヘクタール、畑 3100 ヘクタール、草地 800 ヘクタール、水田 400 ヘクタール、湿地 2500 ヘクタール、その他 200 ヘクタールでした。

一方、白川村・楡林開拓団は、現在の黒竜江省牡丹江寧安県楡林子に入植。40 世帯、201 人でした。

その後、日中戦争はドロ沼状態となり、国際関係も険悪化。1941 年 12 月 8 日、アメリカとの戦争を始めると、満州は日本の食糧供給源となりました。生活物資は配給制となり、農作物にも供出割り当てがおこなわれるようになりました。

建築用のレンガ。積み上げてあるのは焼き上がり、下にあるのはこれから窯に入れる

収穫を喜ぶ開拓団の女性たち

果てしなく広がる満州の大地で耕作に励む開拓団員

ラバによる脱穀風景

開拓団員の子どもたち

朝礼風景。皇居に向かって最敬礼をおこなった（宮城遙拝）

日本人学校で学ぶ子どもたち

トラックで移動する開拓団員

満州の自然はきびしかったものの、多くの開拓団の人々にとっては、かつての中川村に比べれば、はるかに豊かなくらしが実現しつつありました。しかし、それは現地の人々の犠牲のうえに成り立っていたのです。

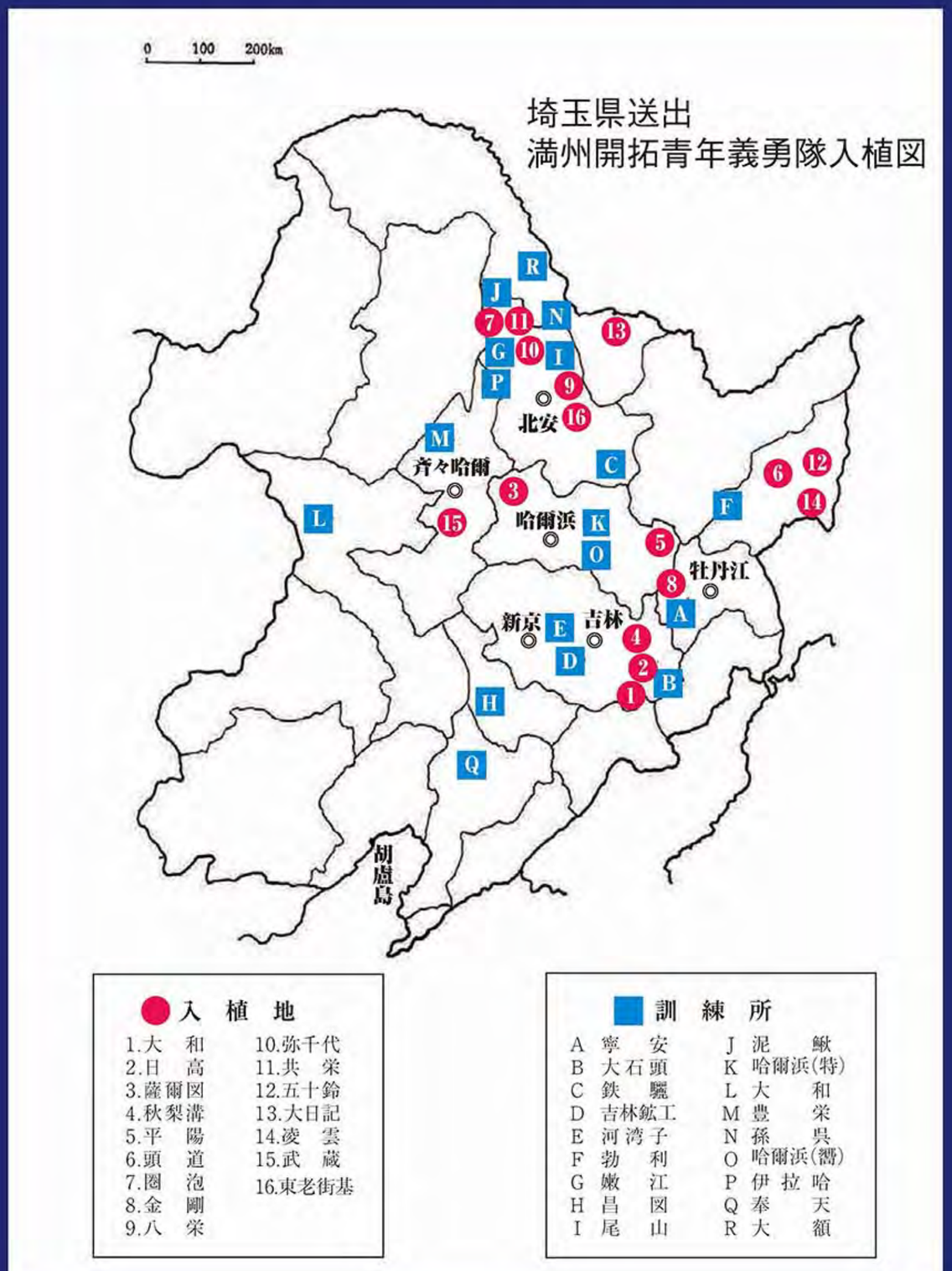
満州へ移民すれば 10 町歩の土地がもらえるといわれていましたが、その多くが現地農民から強制収用に近いかたちで買い上げられたものでした。土地を失った現地農民は、日本人に雇われて働くしかなく、このため、現地農民とのあいだに土地紛争問題が絶えませんでした。

開拓民は、抗議・抵抗する現地の人々を「土匪」「匪賊」と呼んで恐れ、関東軍は武力によって、これを鎮圧。1934年には、謝文東に率いられた中国人約１万人が立ち上がり、関東軍と戦った土竜山事件が起きています。

子どもたちも満州へ

満蒙開拓青少年義勇軍

満州へわたる前に訓練のために入所した茨城県・内原の満蒙開拓訓練所。円形の施設は「日輪兵舎」とよばれた



1937 年 7 月 7 日、盧溝橋事件を契機に、日本は中国との全面戦争に突入します。

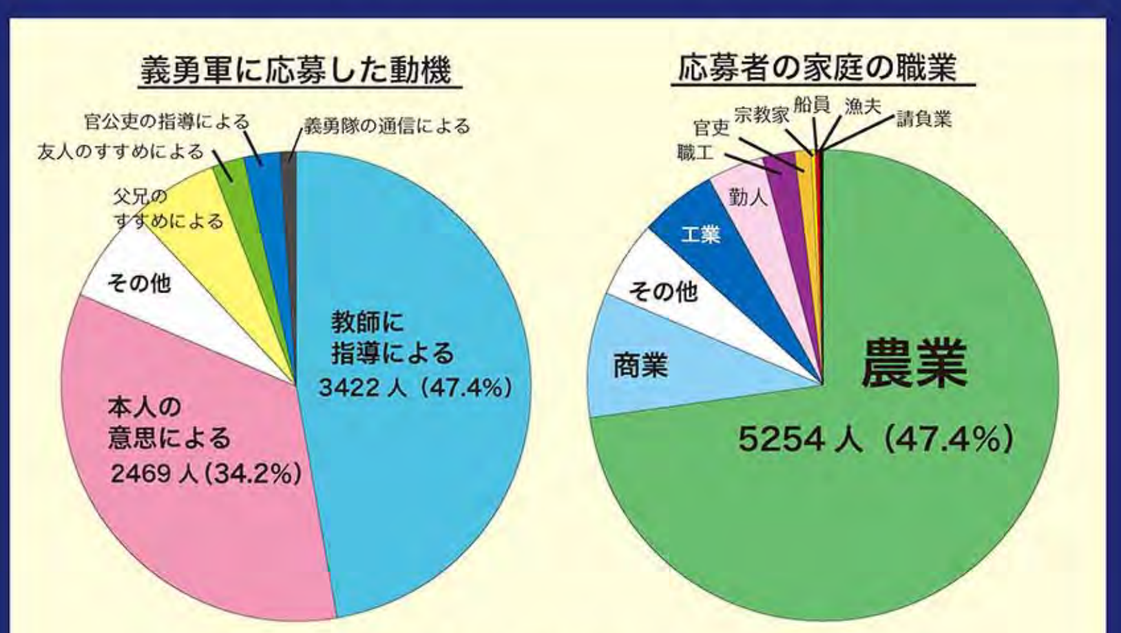
満州移民の 30 歳前後の男子は相次いで招集され、「20 カ年、100 万戸計画」の達成が危ぶまれました。

そこで、1938 年から、満 14 歳から 19 歳の男子が、第 1 次満蒙開拓青少年義勇軍として満州へ送り出されることになりました。

第 6 次義勇軍（1944 年）に参加した遠藤幸蔵さんは、先輩から話しを聞き、宣伝のビラも見て、志願しました。当時 13 歳でした。遠藤さんは、茨城県・内原で 3 カ月の訓練を受けた後、満州へわたりました。

しかし、遠藤さんたち義勇軍が派遣された先は、多くの場合、抗日運動の激しい地域やソ連（現ロシア）との国境付近でした。

農業、開墾、種まき、除草のかたわら、軍事訓練にかり出され、交代で対ソ防衛の任につかされるなど、関東軍の手薄なところを守備する準軍隊の役割を果たさせられたのです。



満州移住協会「年次報告書」（1941 年末現在）

悲劇の逃避行

1945年8月9日午前1時、ソ連軍は空から、
海から陸路から、いっせいに満州へ侵攻した。

1945 年、戦争は抜き差しならない状況になっていました。

しかし、満州には、8月6日の広島への原爆投下も知らされず、8月8日、関東軍による根こそぎ動員がおこなわれ、18 歳以上、45 歳未満の男子がすべて招集されていきました。

翌8月9日午前1時、ソ連軍の侵攻が始まりました。

ところが、関東軍は、開拓民を守るどころか、置き去りにして、いち早く逃走。開拓団には、女性と子どもと高齢者が取り残されました。

8月15日、ようやく避難が始まりますが、ときはすでに遅く、侵攻してくるソ連軍や蜂起した現地の人々に襲われるなどの悲劇に見舞われました。

着の身着のままの逃避行は、多くの悲劇に見舞われた。

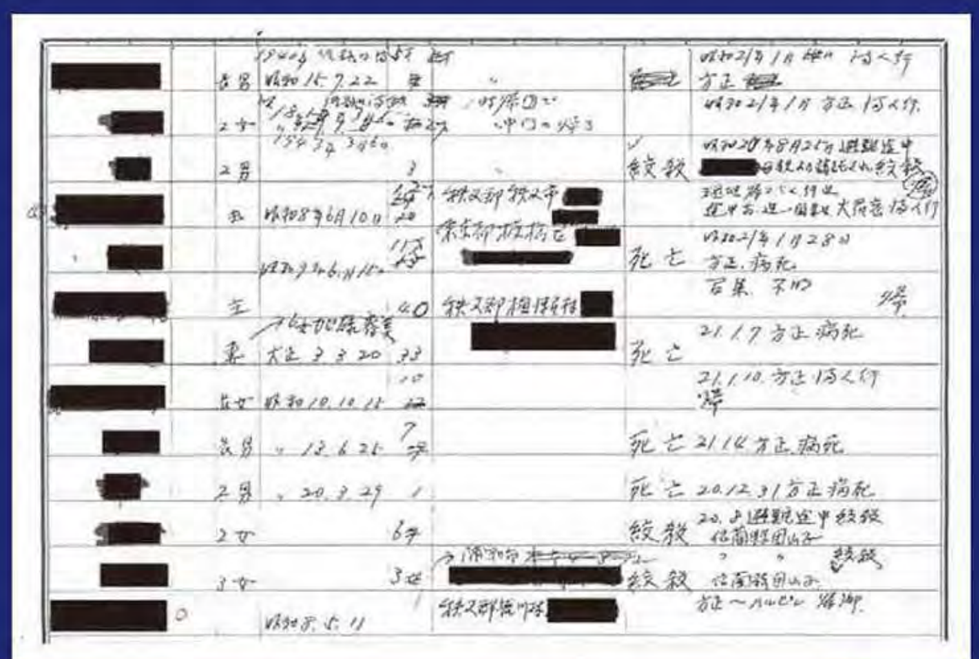
多くの開拓民が犠牲に

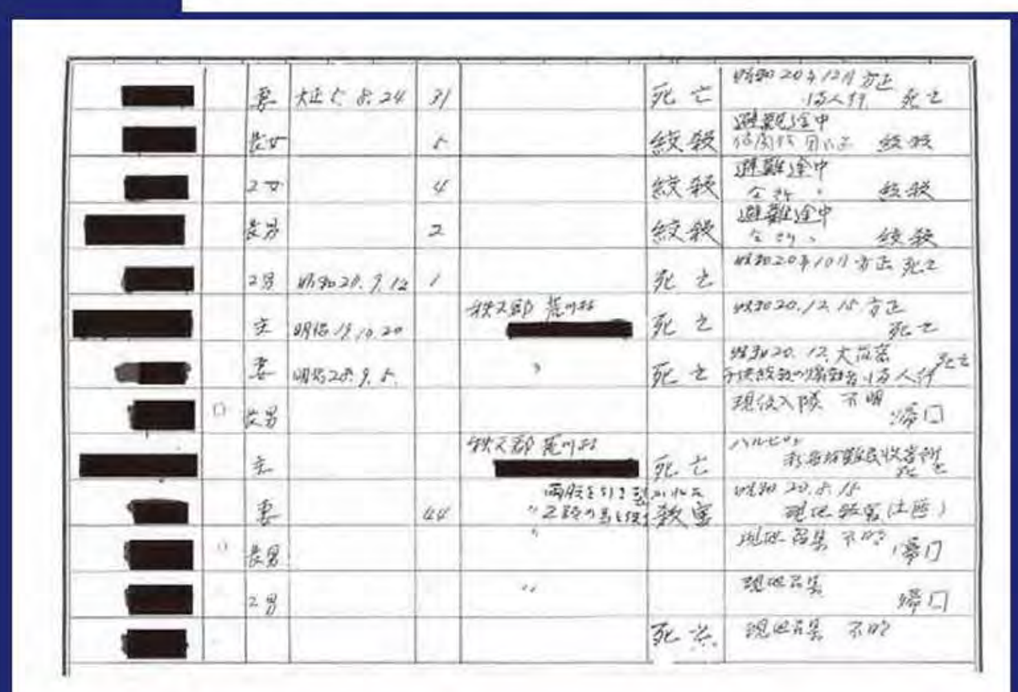
1945年8月15日の敗戦までに、国策によって満蒙開拓に参加した人たちは、22万5千人にのぼります。

敗戦による避難・逃走のなかで、飢え、疲労、病気に倒れ、逃げ切れず、親が子を殺し、集団自殺に追い込まれるなどで死亡した犠牲者は10万人を超え、日本に引き揚げた者は半数の11万人でした。開拓団の多くが、自らのいのちや家族、財産を失ったのです。

中川村開拓団では、現地で死亡した人216人、生還できた人314人、不明者は18人。白川村・楡林開拓団では、現地死亡者が89人、生還者100人、不明者12人となっています。

満蒙開拓青少年義勇軍には、中川村から7人、白川村から7人を送り出しました。が、そのうち3人が大陸の土となりました。





旧荒川村がまとめた犠牲者名簿

所々に「絞殺」の文字が散見できます

満州開拓殉難者の碑

1973年8月15日、中川村開拓団殉難者と白川村楡林開拓団殉難者の名簿を刻み、荒川日野地区の浅間神社わきに建立されました。

拓霊芳魂塔

中川村開拓団団長だった堀口辰三郎らによって、殉難者の冥福を祈って、1957年9月、秩父市札所13番慈眼寺に建立されました。
2005年10月21日、旧荒川村・青雲寺境内に移設されました。

残留邦人の捜索と帰国支援

40余年ぶり平和の使者

満州（現中国）分村の荒川村

村長ら訪中で実情調査

帰国者受け入れに

県営住宅建設を陳情

（16）

北埼玉版

33年前の悲劇 今も影

荒川村の宮崎さん 開拓団の犠牲記録

東品大飯店

1981年（昭和56年）7月8日（水曜日）

戦後はまだ終わらない

旧満州開拓団員の帰国運動

「祖国の土踏ませたい」

来月二日に訪中し調査

荒川村の宮崎さん

毎日新聞 1981年（昭和56年）9月19日（土曜日）

埼玉版

中国東北部に残る元開拓団員

戦時中共に苦労した仲間へ「温かい手」

越冬資金どうぞ

二十二世帯へ各一万円

荒川村贈呈へ

冷夏で作物の収穫見込めず

日本語学級を新設

中国帰還の児童に

早く生活に慣れて…

全国で初の試み

小式・東講で荒川村開

新成人の

富士見の

15日

中川村・白川村は戦時下の 1943 年に合併して荒川村になります。

分村・分郷計画で、満州に開拓団を送り出した荒川村は、1972 年の日中国交回復後、本人の帰国志望にもとづいて、75 年から受け入れを開始します。また、81 年、82 年には、独自の調査団を中国に派遣し、中国国内で、中川村関係 21 人、白川村関係 10 人の生存を確認します。（いわゆる中国残留孤児）

中国帰国者

暖かき祖国 温かき荒川村

16世帯目

日おさえ

ふとんも

祖国永住の夢 実現

孤児・張兄弟に身元引受人

「見過ごすことできない」

農協組合長 宮崎さんが名乗り

荒川村

「いじめ」封じ

市長

「配慮に欠け

桶川市の指名業者問題

議長

中国にわたって、犠牲になった開拓団員の
霊をなぐさめる荒川村の人々

肉親が判明しても、身元を引き受けてくれる保証人がいない人には、元開拓団の幹部だった人たちが身元引受人になりました。

開拓団に応募した人々の多くは、故郷の財産を処分し、渡満しました。無事帰国を果たしたものの、帰る場所のない人々に、村営住宅の提供をはじめ、就職のあっせんや通訳・日本語の指導など、村を挙げて支援の手をさしのべてきました。

力合わせ生活を

中国帰国者

70人招き激励会

荒川で和気あいあい

友好的な雰囲気の中で行われた帰国者を励ます会

初・中級の二組

国の音頭で満州開拓へ

590人入植 280人死亡

埼玉県秩父郡荒川村

故郷の山河は忘れていなかった

帰還の子らに日本語学級〝音頭〟

「全員帰るまで戦後終わらぬ」

満蒙開拓団を送り出した村はいま…

満蒙開拓青少年義勇軍第 15 中隊。
最前列中央にいるのが遠藤幸蔵さん（当時 13 歳）

荒川村の帰国支援事業は、2004 年までつづけられ、受け入れ総数は、本人と家族を含めて 54 世帯 200 人にのぼっています。

2009 年 4 月、合併して秩父市となった荒川地区には、現在 26 世帯 60 人の中国帰国者が住んでいます。

中国からの帰国者を交えてひらかれた満蒙開拓青少年義勇軍の体験報告会（上）で、自らの体験を語る遠藤幸蔵さん（下）

元秩父市職員

黒沢　桂助さん

戦前、中国東北部に満蒙開拓団、満蒙開拓青少年義勇隊として、多くの村人を送り出してきた旧荒川村（現秩父市）。戦後、中国残留孤児の帰国支援に、村をあげて取り組んできた旧荒川村で、自治体職員として、また一人の人間として、帰国者の生活を支えてきました。

国際交流の時代、帰国者の出番を

帰国事業は一段落しましたし、残留孤児本人たちは、昨年（2008 年）4月から帰国者支援制度というのが始まり、生活保護世帯と同じ程度の恩恵を受けていますから、いまは安定しています。

今後は、２世、３世の問題でしょう。

秩父地域の人たちは、戦前に村をあげて開拓団を中国に送り出したということを知っています。彼らに対しては、「苦労をしてきた」という気持ちもあって、地域で受け入れてくれていました。とくに会社関係の人は、そういう歴史を知っている方が多く、いままでも仕事で受け入れてくれていたんです。

ところが、最近の「派遣切り」のなかで、彼らは一番先に首を切られています。日本語ができませんので、真っ先にターゲットになります。いまは一人の人間が一つの仕事をしていれば良いという時代ではなく、多種多様な仕事をしなければ、お金がもらえない時代ですから。

よく、「なにかいい仕事はないか」と電話がかかってくるんです。なんとか彼らに働く場を提供したいと思っているんですが、まだ厳しい状況ですよね。いまは、貯金を切り崩しながら生活している人もいます。

最近では、秩父の芝桜を見に、アジア、とくに中国や台湾から観光客が来ることが多いんです。いまは国際化の時代ですから、孤児たち、そして２世、３世の出番というか、彼らが地域に出ていく機会をつくっていかなければいけないんじゃないかと思っています。

これからの課題は、２世、３世の人たちの生活の安定、そして彼らと地域との関係づくりですね。

『SAITAMA ねっとわーく』（2009 年 6 月号）より